2006.11
Vol.6
[シリパのほし]
Shiripaの星
北星学園余市高等学校同窓会誌
H.S

夢と希望を生きる力に

37期 大久保文博

私は現在、明治学院大学国際学部に進学し開発経済学を専攻する傍ら学生NGOの代表としてベトナムやミャンマーで教育支援を行っています。

ベトナムは著しい発展の中で格差が広まり始め、またミャンマーは軍事政権下の中全体的に貧しい生活で不自由を強いられている状況です。私はそうした国々の子ども達に教育支援として助成金支給をしたり、交流活動を通じて日越、日緬の友好の架け橋として活動をしています。

しかし、昔を振り返り見つめ直すと、私は大学生になることなんて想像もできなければ、高校を卒業することすら夢のまた夢でした。これが人の役に立ちたいなんぞという考えに至るわけですから、昔の私を知る仲間は気がおかしくなったのかと心配する始末です。

私は北星余市に入学する前、世界は自分を中心にして周っているかのような考えで自由奔放に生きていました。大人の言うことには背を向け、すべてを自分の都合の良いように解釈し、自分の主張ばかりを言い続け、親が苦しんでいるのを横目に遊び呆けていました。高校は二度も辞め、人に迷惑をかけてばかりで行く場所もなく暇を持て余している時に北星余市と出会ったのです。

ここでの三年間は私の人格自体を変えるきっかけになったといっても過言ではありません。下宿生活をする中で共同生活を学び、学校生活では楽しいときも辛いときも一緒に共有することにより仲間や先生と熱い信頼関係を築くことができました。

そして忘れられない一番の想い出はやはり卒業式です。仲間達や先生、下宿のおばちゃん達との別れはとても辛かった。北星余市での三年間を考えると人前で泣く事などなかった私が涙を堪えることはできず、人目も憚らず涙しました。

現地でのNGO活動や北星余市での生活で共通するのは「夢と希望」を与えてもらうということです。

私は北星余市で「夢と希望」を持つことができました。そして、支援をしている子ども達からは「夢と希望」の大切さを学びました。

この学校は日本の社会、教育にとって「希望」です。これからも悩める子羊の光であり続けることを願います。

悩み苦しんだ子羊より

同窓会会長挨拶

12期 松浦一法

三年前強歩遠足に参加した。運動という文字が私の中から消え去っていたところにいきなり三〇キロを歩こうなんて考えもしなかった事である。

平成九年七月余市町内のイベント会場に足を運んだ私は、偶然にも同じ一二期生の馬場氏に出会った。久しぶりの再会にも関らず馬場氏は開口一番「同窓会の役員やってよ」何を言っているんだろう？　でも同期の誘いである。断るに断れない。何も解らない同窓会の活動。その上まさか強歩遠足にも出るなんて、どうしても出なきゃならないのだろうか……。ピンチに追いやられた自分がそこに居た。参加しても間違いなくリタイアするだろう。そんな意識を持って一歩を踏み出した。「もーダメだ」の言葉が足より先に出てしまう。しかし、信じられない事が起きていた。一緒に参加した同窓生の励ましの言葉が私の足を動かしてるではないか！

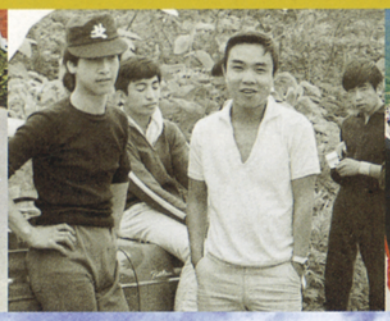
仲間がいる、支えられている。ゴールできたじゃないか。頑張れた。

久しぶりに感動を味わった瞬間ふと思った。これが北星余市だ！

今年四月馬場前会長の後を継いで会長職を受けた。どこまで出来るか不安は隠せないが、同窓会活動もこれで行くしかないでしょう。全国にいる同窓生の皆さんどうかお力をお貸し下さい。

高校ダム

- 山岸千嘉子先生
- 清水　和重先生
- 12期 小笠原美智子（旧姓　伊与）
- 14期 平野満寿美



山岸 千嘉子

胸を熱くする北星余市での日々

同窓生の皆さんにはお元気にご活躍のことと思います。私は北星余市の創立と共に教員の第一歩をふみ出しました。多くの困難の中、一期・二期の皆さんと教職員が一つになって新しい学校づくりにとりくんだ創設期、大きな希望と喜びをもって過した日々のことを思います。初冬になってようやく自分達の学校に引っ越すことができたこと、新しい体育館で行われた一期生の卒業式のこと、そして十周年を迎えた年のことなど…今でも胸が熱くなります。

体調を崩した時期もありましたが、健康が回復して八期生を三年間担任できたことはとても嬉しいことでした。いろいろな取り組みの中で、生徒も私もいっしょに成長した三年だったように思います。折にふれ、いろいろ懐かしく思い出します。十周年を機に退職をしましたが、その後も、小樽・近隣の中学校・養護学校に勤務し、はまなす学園でも、多くの交流をもつことができました。

九月十七日には定山渓で八期生の同期会が開かれました。二十周年の改築で壊されることになった旧校舎を会場に集まって以来、十年ぶり、北垣先生、春日先生、私の三担任と三十名余りが集まりました。五十才を目前にした公私共に立派に活躍している仲間が大阪・神戸からも駆けつけ、親しく近況や昔を語り合いました。校庭で桜木を植えている写真などがスクリーンに映し出されると、共に過ごした日々のことがいろいろとなつかしく甦りました。

このごろは、趣味の書道や、夫や仲間と近くの山に登ったり、古文書の解読ボランティアで学んだりと少し忙しく過ごしています。

卒業生の皆さんと会ったり、話したりできることは私達の共通のたのしみですのでいつでも寄って元気な顔を見せて下さい。北星余市高校のさらなる発展と皆さんのご活躍をお祈りしています。

清水 和重

私の北星余市

一九七四年四月、小樽駅からバスに乗って余市へと向かいました。塩谷の坂を下るときに見た夕陽の美しさが何故か今でも覚えています。私の教師生活のスタートでした。あれから三十二年、文字通りあっという間に過ぎてしまいました。

北星余市での十一年間は、私にとっては原点であり、実に多くのことを学んだ十一年でした。時には支えあい、時には激しくぶつかり合いながら北星余市の教師集団は、教育実践を進めていました。それこそが北星余市の最も誇るべきものでした。教育という営みの中で、最も重要なのは教師集団づくりであることを北星余市は私に教えてくれました。学校づくり＝教師集団づくり、そのことは、女子中高に転勤してからも変わらぬ私の実践課題です。

思い出すことは多々あります。一年生研修会での「団結の樹」、遅刻一掃の取り組み、十日以上も合宿所に泊り込んで準備した学校祭・壁新聞・仮装、朝四時過ぎまでの職員会議、一〇・一六暴力事件、クラスの命運をかけて取り組んだHR討議などなど。その一つひとつが今の私の財産です。

同窓生の皆さん、元気ですか。しんどい世の中です。私もだんだんしんどくなっていますが、みんなと共に過ごした日々に支えられて、何とか元気にやっています。いつかまた、卒業式の晩のように集まって騒ぎたいね。それまで、元気に、元気に生きて行きましょう。

北星余市 メモラン

夢を諦めず自分らしく進みたい

12期 小笠原 美智子（旧姓 伊与）

大好きな北星余市を卒業してから、早二十七年が過ぎました。私達十二期生は色々な問題も抱える中、一人一人が濃密な青春時代を送っていた様に思います。

当時は辛いことも少なくなかった高校生活を懐かしいと思えるようになったのは社会に出てかなり経ってからでした。

現在私は大学時代から始めた司会の仕事をフリーでさせて頂いています。様々なイベントや式典、結婚式やパーティ、ファッションショーや映像のナレーション等々。華やかで楽しそうに見える仕事ですが、その大部分は初めて会ったお客様との短い打合せで本番に臨まなければならず、大半の方達とは一期一会の出会いとなります。僅かな時間の中でどれだけ希望を叶えて差し上げられるのか。一番大切なのは会話でのコミュニケーションをしっかりと取る事で、その方法こそ私が高校時代に仲間達との幾度もの話し合いの中から得た大きな財産になっているのです。

相手の話をよく聞き、思いを理解しようと努める事。簡単そうで結構難しいですよね。

そして先生達からは「夢を諦めない事の大切さ」を教えて頂きました。いつまでも何か目標を持ち、ゆっくりでもいいからそれに向って進み続ける事。

私の大好きな言葉、Never too late. Never too old.（遅すぎることは無い。年を取り過ぎてという事も無い）の気持ちでいつも自分らしく歩いていたいなぁと思っています。

10年ひと昔…回来中国

14期 平野満寿美

六月、「思いたったら……」で、慌しく荷作りをし、二ヶ月滞在の計画で中国へ旅立った。前半四十日は、私が十二年前、日本語教師として生活していた黒龍江省鶏西（チーシー）市へ、後半は北海道・黒龍江省友好提携二十周年記念事業のお手伝いで哈爾浜（ハルビン）へ、そしてちょっとだけ友人を訪ねるという旅だった。実は、最近日本の各新聞社が「日本語教育が市の財政を支える」といった内容で鶏西（チーシー）市を取り上げ記事になっている。日本人にとって知られていない町が、こんな形で紹介されていると、大いに関わっていた私としては、どうしても自分の身体で確かめたかったのだ。

十二年前と街並や人々の生活は大きく変ってきていた。当然のことだろうが、そのテンポの早さに驚かされた。反面、ちょっと寂しさも感じた。人口百八十万人の市で、日本語を学ぶ学生は約一万五千人、その内南方から来ている学生が大半を占める。皆、人生に勝負をかけて来ているのだ。昨今、日中関係の冷たさを語る人が多いが、人と人との間には、暖かい幸福な関係が築けると実感できる旅だった。百聞は一見にしかず……心豊かにさせてもらえる旅だった。

3期同期会

松原 千鶴子

ぼちぼち続けていた三期会が二〇〇二年、深谷先生の校長勇退祝賀会を機に余市近郊に住む人達で声を掛け合い、五年ごとに開催される事になりました。深谷先生、鈴木先生、森元先生も快く参加して下さり、一度参加したメンバーが連絡の取れない人達を探し出し誘い合って今では四十名以上が集まる様になったのです。

今年は五月六日みどりやさんの三階で「階段がきつい」とか「五年後は生きていないかも」等々好きな事を言いながら、久しぶりに母校を見に行く人や、余市の町を見学する人。卒業して三十七年も経ち先生か生徒か区別がつかない様になったけれど、会った途端、日頃のストレスや環境、立場を越え懐かしい絆がよみがえり話に花が咲きました。先生を囲み心の底から笑い楽しい時間を共有して、元気に地元へ帰って行きました。

都合で参加出来なかった人の為に、お盆の帰省時に十名程集まりミニ同窓会も開催されました。

校長就任あいさつ

学校長　山　弘子

同窓生の皆さん、お元気ですか……。

私は、もちろん元気です。元気のように振る舞っていると、いつのまにか元気そのものになるというのは、私が北星余市三十八年の暮らしの中で身につけた技かもしれません。

今年度から私が校長職の繋ぎを担うことになりました。柄にもないことで恥ずかしい限りです。

そして今、私の頭の中は、この先もこの余市の地で「北星余市」を生き残らせるにはどうしたら良いかということでいっぱいです。マスコミで話題になったりすると、生徒数は一時的に膨れ上がることもあります。しかし基本的には、地方にある小さな私学は常に生徒減との戦いを強いられる宿命にあります。まして「進学」や「スポーツ」等のエリート校を目指した学校でなければなおのことです。

「北星余市」が、それぞれの時代の中で傷つき悩む若者をこそ、率先して受け入れ、今日まで生き延びてこられたのは、奇跡と言えるかもしれません。これは、卒業生が社会の中で誠実に生きていてくれていることと、その母さん・父さん達の口コミによる宣伝があったればこそのことです。

しかしながら、皆さんに心配をかけた二〇〇一年九月の大麻事件以降、二〇〇二年度からの急激な生徒減少は、更に全国的な少子化の影響もあって益々深刻なものとなっているのが本校の実状です。通信制・単位制の学校が増えたのも拍車をかけています。ある意味、十八年前に廃校の危機に直面した時以上の厳しい状況と言えるでしょう。

一方、世の中には、まだまだ「北星余市」のような学校を求めている子供、若者達がたくさんいるはずです。本校の教育の中身は長所も短所も含めて、皆さんが一番よく解ってくれているはずです。開校当初からの底流にあるものは少しも変わっておりません。泣いたり笑ったり、生身の人間の関わりを中心に据えているのは昔からのことです。それはむしろ、今の時代にこそ、より必要になってきている教育とも言えます。

どのような形でも結構です。皆さんの周りの方々に、「母校」の教育を紹介してあげて下さい。学校の資料等は、電話一本あれば必要なだけすぐに送ります。言うまでもなく私達教職員も、一丸となって日々頑張っています。是非ぜひ、皆さんの力も貸して下さい。「北星余市」は不滅だと信じて、祈りながら奔走する毎日を過ごしております。

「合宿所のご利用は事務局まで」

40周年記念事業として、一昨年の台風で被災した合宿所を皆様のご寄付によりリニューアルしております。暖房設備を持っていないためグリーンシーズンの利用に限られますが、厨房兼食堂、ごろ寝スペース、水洗トイレにシャワーが完備されておりチョットした会合や夜通しの飲み会にはうってつけです。同窓生も有効利用が可能です。

詳しくは事務局でご確認ください。

同窓会員奨学金について

母校の教育活動を支援するという同窓会の目的実現のために、会員の子供が北星余市へ在学中、希望者に月五千円を支給しています。

十一月一日現在、四人が該当しています。

15期福澤春美さんの息子
裕幸くん(3年)

10期見上順恵さんの息子
鉄馬くん(3年)

5期本間美智子さんの娘
智美さん(2年)

10期齊藤徹さんの娘
由紀さん(3年)

生徒募集についての窮状の訴え

皆さんの母校北星余市は創立以来ずっと生徒募集で苦しんでまいりました。かつて安定的な生徒確保の見通しが立たずに廃校の危機もありましたが、その都度なんとか道が開かれて今日に至っています。しかし、今年度はこれまでにない深刻な事態であると捉えています。今年の春の入学者はついに百名を切り二桁になりました。これは北星余市高校の歴史上で初めてのことです。皆さんもご存知かと思いますが、ヤンキー先生ブームに乗って二〇〇四年度、二〇〇五年度は生徒が集まりました。しかし、この二年間はイレギュラーな年度であり、二〇〇一年九月の大麻事件後の二〇〇二年度入学者からの急激な減少傾向に歯止めがかかっていない状態です。アンケートによりますと、本校を知った一番の媒体はテレビであると多くの人が答えています。今年度はそのテレビの影響がほとんど期待できません。このままでは来春の入学者数は五十名近くまで落ち込むことも十分あり得ます。そうなると本校の存続問題にもなります。そうした現状を受けて教職員一体となって危機意識を持ち、日々悪戦苦闘していますが、教職員の力だけでは限界があります。そこで同窓生の皆様の力を貸して頂きたく紙面でお願いすることにいたしました。それぞれの場で、どのような形であっても結構ですので、本校の教育を伝えてください。そして、本校に関心のありそうな方をぜひ紹介してください。学校案内等の資料は必要なだけお送り致しますのでお申し出ください。ぜひ皆さん一人ひとりの力によってこの窮状を救い、北星余市が積み重ねてきた本物の教育の光を消さないで下さい。よろしくお願い致します。

（入試担当　千葉敏之）

編集後記

今年度のニュース作成段階で、学校側から「学校の窮状を同窓会誌の紙面で是非訴えさせてほしい（ニュース4面に掲載）」と急な依頼がありました。丁度同じ時期、娘が通っている民間学童保育所も、児童の減少を理由に札幌市の助成金が受けられず閉所の危機に瀕しており、存続に向け父母が日々奮闘していた最中でしたので、個人的な事情ですが痛みを共感する意味で紙面の掲載を快く引き受けました。

少子化に拍車が進み、学校も学童もこれからもっと大きな危機がやってくる可能性は大ですが、『大切なもの』を失くさないよう、できる限りの力で進んでいけたら良いなと思っています。（え）

Shiripaの星　Vol.6
2006年11月21日発行

顧　　問　塚原　治
編 集 長　松村　悦子（15期）
副編集長　松浦　一法（12期）
編集委員　安藤　栄子（1期）
本間美智子（5期）
馬場　希　（12期）
平野満寿美（14期）

[発行]
北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会
〒046-0003　余市郡余市町黒川町96番地
TEL(0135)23-2165　FAX(0135)22-6097
E-mail　hokuseiy@netfarm.ne.jp

訃　報

二〇〇五年十一月～二七期　竹田　純
一期　館　哲子　一月
五期　成田春夫　八月